

# 女子大学生の自我同一性地位と社会的問題解決能力との関連

伏見 友里<sup>1)</sup> 井森 澄江<sup>2)</sup>

Identity Status and Social Problem-Solving Among Undergraduate Students

Yuri FUSHIMI Sumie IMORI

## 要旨

本研究は、これから職業を決定してゆく大学生の自我同一性地位を探るとともに、自我同一性と社会的問題解決、適応との関連を検討することを目的とした。

大学生（N=222, M = 20.35歳）を対象に、自我同一性地位、社会的問題解決としてSPSI-R（Social Problem-Solving Inventory-Revised）、適応としてQOSL（Quality of Student Life）を実施した。自我同一性の判定においては、222名中152名（68.5%）がD-M中間地位と判定された。適応との関連では、合理的な問題解決方略（APS）が適応的生活と回避的問題解決方略（AS）が不適応的生活と関連していた。

キーワード：自我同一性地位 社会的問題解決能力 SPSI-R (Social Problem Solving Inventory-Revised) QOSL (Quality of Student Life)

## 問題と目的

Ericson (1959<sup>1)</sup>) は、青年期の発達課題としてアイデンティティの確立をあげている。「自分とは何か」「社会の中でどのように生きて行くのか」といった問いを通して自分自身を形成していく時期である。そのような問いを繰り返す中で、「これが自分だ」といった実感を得られることを自我同一性と呼ぶ。多くのことから取捨選択し、1つのことを選び取っていく、この意思決定をEricsonは、危機（Crisis）と呼び、青年期にはこの問題に直面し、自ら考え自分のアイデンティティを獲得することが必要とされている。

しかし、近年、青年期における心理社会的モラトリウムの状態からいつまでも卒業できず、自我同一性の拡散している青年がますます増加してきている（小比木, 1978<sup>2)</sup>：石谷, 1944<sup>3)</sup>）。

つまり、青年期の課題である、「自分とは何か」という意識の獲得が困難になってきている。岡本（2002<sup>4)</sup>）は、これが必ずしも青年期だけの問題ではなく成人期以降にも繰り返されることを指摘している。

Marcia (1966<sup>5)</sup>) は、危機の乗り越え方を、自ら真剣に考え、責任を引き受けられる形で自分のアイデンティティを選択している統合志向（① Achievement）、人生のいくつもある選択肢から1つを選ぼうと奮闘するモラトリウム（② Moratorium）、親や教師、年長者の価値観を鵜呑みにしているフォークロージャー（③ Foreclosure）、いくつもの選択肢を目の前にして、その中から1つを選ぶことができず、途方にくれている拡散（④ Diffusion）の4つに分類した。

加藤（1983<sup>6)</sup>）はMarcia（1966）が仮定した、自我同一性を規定する2つの心理社会的要因である「危機（Crisis）」および「自己投入（Commitment）」を基に、同一性達成地位（①

<sup>1)</sup> 東京家政大学人文学部教育福祉学科助教

<sup>2)</sup> 東京家政大学人文学部教育福祉学科発達心理研究室

Achievement)、権威受容地位 (② Foreclosure)、積極的モラトリアム地位 (③ Moratorium)、同一性拡散地位 (④ Diffusion)、同一性達成－権威受容中間地位 (⑤ AF 中間地位)、同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位 (⑥ D-M 中間地位) の 6 つに同一性地位を分類した。この研究では、各々の時点における危機および自己投入の水準と現在の同一性地位との関連、また性差による検討が行われ、女子においては大学に入った頃の危機および自己投入の水準が、その後の同一性地位と密接に関係するとされた。

また、Grotevant は、Ericson の自我同一性の探求を問題解決行動と捉えている。この時期、色々な領域 (職業、イデオロギー、価値観、人間関係など) で自分あるいは自分の環境についての情報を取捨選択しながら重要な人生の自己決定を行う。そうした問題解決行動としての自我同一性の探求は、領域の文脈や個人的特徴に影響を受ける (Grotevant, 1987; 畑ら, 2013<sup>7)</sup>)。

そこで、本研究では、これから職業を決定していく女子大学生の自我同一性地位を探るとともに、それが社会的問題を解決する力とどのように関連しているのか、また、大学生活の適応とどのように関連しているのかを検討していく。

本報告の具体的な目的は、以下の通りである。

1. 女子大学生の自我同一性地位を検討していく。
2. SPSI-R (Social Problem Solving Inventory-Revised) の学年差を検討していく。
3. 自我同一性地位と SPSI-R (Social Problem Solving Inventory-Revised) との関連を検討していく。

4. 自我同一性地位と QOSL (Quality of Student Life) との関連を検討していく。

## 方法

1. 対象者：首都圏 A 女子大学 222 名 (1 年入学生 77 名、4 年進級生 78 名、4 年卒業生 68 名、平均年齢 20.35 歳、SD1.90)
2. 実施時期：4 年卒業生；2016 年 3 月下旬、4 年進級生および 1 年生入学；2016 年 4 月上旬、1 年入学生；2016 年 7 月下旬 (QOSL 項目のみ)
3. 実施方法：クラス懇談会時に質問紙を配布、回答を依頼し、その場で回収をした。その際、教示としてこの調査は成績とは関係がないこと、回答を強制するものではないこと等を伝えた。
4. 質問紙の構成：フェイスシート、段階評定尺度項目、自由記述項目からなる。
  - (1) フェイスシート (年齢、家族構成、現在の居住形態等)
  - (2) 段階評定尺度項目：6 段階評定尺度－自我同一性地位判定尺度 12 項目 (加藤, 1983<sup>6)</sup>)。5 段階評定尺度－SPSI-R39 項目 (中澤ら, 2007<sup>8)</sup>)、ARS 愛情の関係尺度 12 項目 (Takahashi, 1990<sup>9)</sup>, 2000<sup>10)</sup>)、4 段階評定尺度－IPPA (Inventory of Parent and Peer Attachment) 28 項目と 25 項目 (Armsden&Greenberg, 1987<sup>11)</sup>)、2 段階評定尺度－QOSL32 項目 (中澤ら, 2007<sup>8)</sup>)。
  - (3) 自由記述項目：家族構成、居住状況、希望進路、大学での取得予定資格、1 年間の目標および一番つらかったこと、嬉しかったこと等。

本報告では、1) 自我同一性地位判定尺度、2) SPSI-R、3) QOSL について取り上げる。ARS 愛情の関係尺度、IPPA については、井森

ら (2017<sup>12)</sup>) を参照。

表 1 自我同一性地位定義 (加藤 (1983) より)

自我同一性達成地位判定尺度項目	
同一性達成地位	過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者
権威受容	過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者
A-F中間地位 (同一性達成・権威受容 中間地位)	中程度の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者
積極的モラトリアム	現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている者
同一性拡散	現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い者
D-M中間地位 (同一性拡散・積極的モ ラトリアム中間地位)	現在の自己投入の水準が中間程度以下の者のうちで、その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くはないが、将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリアム地位ほどには高くない者

#### 1) 自我同一性地位判定尺度 (加藤, 1983<sup>6)</sup>)

加藤 (1983) によって作成された同一性地位判定尺度12項目を用いた。各項目について、「6. 全くそのとおりだ」から「1. 全然そうではない」の6段階評定で回答を求めた。この尺度は、現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入への希求の3つの変数から、加藤の分類に従い、同一性達成地位 (Achievement)、権威受容地位 (Foreclosure)、積極的モラトリアム地位 (Moratorium)、同一性拡散地位 (Diffusion)、同一性達成－権威受容中間地位 (AF中間地位)、同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位 (D-M中間地位) の6つの同一性地位を判定した。

#### 2) SPSI-R (中澤ら, 2007)

D’Zurilla, Nezu, & Maydeu-Olivares (2002<sup>13)</sup>) によって開発された社会的問題解決に関する尺度 SPSI-R52項目に関して、大学生677名のデー

タに基づき因子分析を行い、再構成された39項目からなる尺度SPSI-R (中澤ら, 2007) を用いた。SPSI-Rの特徴は、社会的問題解決能力を大きく「問題定位」と「問題解決方略」の2つに大きく分けていることである。「問題定位」とは、問題に対する個人の考えや評価、感じ方を反映した認知－感情スキーマを含み、社会的問題解決における動機づけ機能を担っている。「問題解決方略」は、個人が問題を理解し、効果的な解決もしくは問題を対処する方法を見つけるスキルを指す (D’Zurilla et al, 2002<sup>13)</sup>)。中澤ら (2007) による SPSI-R は「問題定位」として肯定的問題定位3項目 (PPO: Positive Problem orientation) 否定的問題定位9項目 (NPO: Negative Problem Orientation)、「問題解決方略」として、合理的問題解決19項目 (RPS: Rational Problem Solving)、衝動／不注意型問題解決4項目 (ICS: Impulsivity/

Carelessness Style)、回避的問題解決 4 項目 (AS: Avoidance Style) 合計 39 項目からなる。各項目について、「4. あてはまる」から「0. あてはまらない」の 5 段階で回答を求めた。

### 3) QOSL (中澤ら, 2007)

大学生の大学への適応の査定として、福盛ら (2002<sup>14)</sup>) によって開発された大学生の QOL を測定する尺度である大学生のチェックカタログ 45 (QOSL) に関して、大学生 677 名のデータに基づき因子分析を行い再構成された尺度 (中澤ら, 2007) を用いた。中澤ら (2007) による QOSL は、生活充実感 13 項目、自信欠如 6 項目、体調不良 7 項目、将来展望 6 項目の 4 下位尺度 合計 32 項目からなる。各項目について、「1. はい」と「0. いいえ」の 2 件法で回答を求めた。

## 結果と考察

### 1. 自我同一性地位判定尺度について

自我同一性地位判定尺度項目 12 項目を 4 項目ずつ合計し、1 年入学生、4 年進級生、4 年卒業生の各学年による自我同一性地位判定尺度 3 変数間の平均得点 (SD) を算出し表 2 に示した。

全体では、現在の自己投入の希求 16.02 (3.24)、過去の危機 17.14 (2.76)、将来の自己投入の希求 16.43 (2.66) であった。下位尺度において分散分析を行ったところ、「現在の自己投入」F

(2,219) 4.29,  $p < .05$ 、「将来の自己投入の希求」F (2,219) = 4.91,  $p < .01$  に有意な群間差がみられた。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「現在の自己投入の希求」で 1 年入学生と 4 年進級生との間に有意な差がみられた。「将来の自己投入の希求」では、4 年進級生と 4 年卒業生との間に有意な差がみられた。「過去の危機」には有意な差がみられなかった。1 年入学生は、4 年進級生と比較し「現在の自己投入の希求」得点がやや低い。4 年進級生は、「現在の自己投入の希求」が 1 年入学生よりも、「将来の自己投入の希求」が 4 年卒業生よりもやや高く、項目に『私は一生懸命うちこめるものを探し求めている』とあるように、調査時期に就職活動中ということからも、自分が本当に何をしたいのか考え、目標のために努力する姿が読み取れる。4 年卒業生においては、「現在の自己投入の希求」、「過去の危機」は平均よりやや高いが、「将来の自己投入の希求」が 4 年進級生に比べてやや低かった。就職活動を終え卒業を控えて、学生としてではなく社会人として社会にでる不安の現れかもしれないと考えられる。

次に、加藤 (1983) の分類にしたがって自我同一性地位の判定を行った。その結果を、表 3 に示した。参考に加藤 (1983) の各同一性地位の分布を表 4 に示した。

表 2 表各学各学年による自我同一性地位判定尺度得点

同一性達成地位	1年入学生(n=77)	4年進級生(n=78)	4年卒業生(n=68)	合計(n=222)
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
現在の自己投入の希求	15.17 (2.78)	16.56 (3.69)	16.37 (2.98)	16.02 (3.24)
過去の危機	16.99 (2.84)	17.26 (2.83)	17.18 (2.60)	17.14 (2.76)
将来の自己投入の希求	16.36 (2.82)	17.09 (2.49)	15.73 (2.50)	16.43 (2.66)



同一性達成地位	1年入学生		4年進級生		4年卒業生		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
同一性達成地位	0	(0.0)	7	(9.0)	2	(3.0)	9	(4.1)
権威受容	2	(2.6)	4	(5.1)	2	(3.0)	8	(3.6)
A-F中間地位	1	(1.3)	7	(9.0)	6	(9.0)	14	(6.3)
積極的モラトリアム	10	(13.0)	8	(10.3)	3	(4.5)	21	(9.5)
同一性拡散	6	(7.8)	6	(7.7)	6	(9.0)	18	(8.1)
D-M中間地位	58	(75.3)	46	(59.0)	48	(71.6)	152	(68.5)
合計	77	(100)	78	(100)	67	(100)	222	(100)

「同一性達成地位」は4年進級生、4年卒業生合わせて9名みられたが、1年入学生にはみられなかった。「権威受容」は、1年入学生2名、4年進級生4名、4年卒業生2名の8名であり「A-F中間地位」は、1年入学生1名、4年進級生7名、4年卒業生6名であり、学年があがると人数が多くなる傾向がみられた。「積極的モラトリアム」は、1年入学生10名、4年進級生8名、4年卒業生3名の21名であり、D-M中間地位の次に多かった。「同一性拡散」は、各学年ともに6名であった。学年があがると、過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っていると言われる「同一性達成」の人数が増え、これから「同一性達成地位」になるであろう中程度の危機を経験した上で現在高い水準の自己投入を行っている「A-F中間地位」の人数も増えている傾向がみられた。本研究においても、これまでの大学生を対象とした研究と同様にD-M中間地位が全体の半数を占める結果となった。

表4 各同一性地位の分布 (n=310)

(加藤 (1983) より)

地位	人数(%)
同一性達成地位	36 (11.6)
権威受容	12 (3.9)
A-F中間地位	18 (5.8)
積極的モラトリアム	47 (15.2)
同一性拡散地位	12 (3.9)
D-M中間地位	165 (53.2)

## 2. SPSP-Rについて

### (1) 各学年によるSPSP-R

社会的問題解決に関する尺度である中澤ら(2007)によるSPSP-R(合理的問題解決19項目(RPS)、否定的問題定位9項目(NPO)、衝動/不注意型問題解決4項目(ICS)、回避的問題解決4項目(AS)、肯定的問題定位3項目(PPO))の合計39項目を用いた。各学年によるSPSP-R下位尺度平均得点(SD)を算出し表5に示した。

表5 各学年によるSPSP-R下位尺度平均得点

	1年入学生(n=77)		4年進級生(n=78)		4年卒業生(n=68)		合計(n=222)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
RPS	2.32	(.55)	2.44	(.51)	2.52	(.59)	2.42	(.55)
NPO	2.54	(.67)	2.22	(.84)	2.24	(.69)	2.33	(.75)
ICS	2.06	(.74)	1.94	(.75)	1.90	(.85)	1.97	(.77)
AS	1.92	(.69)	1.64	(.69)	1.63	(.70)	1.73	(.71)
PPO	2.41	(.78)	2.55	(.68)	2.47	(.73)	2.48	(.73)

合計得点をみると、中澤ら（2007）と同様の傾向であるが、ICS得点がやや低い傾向がみられた。各学年によるSPSI-R下位尺度平均得点の差を検討するために、分散分析を行ったところ、「否定的問題定位（NPO）」 $F(2,219) = 4.37, p < .05$ 、「回避的問題解決（AS）」 $F(2,219) = 4.25, p < .05$ に有意な群間差がみられた。「合理的問題解決（RPS）」「衝動／不注意問題型解決（ICS）」「肯定的問題定位（PPO）」の平均得点は、各学年に差はみられなかった。Tukey法による多重比較を行ったところ、「否定的問題定位（NPO）」では、1年入学生と4年進級生・4年卒業生との間に有意な差がみられた。「回避的問題解決（AS）」では、1年入学生と4年進級生・4年卒業生との間に有意な差がみられた。

1年入学生は、4年進級生・4年卒業生と比較し、「否定的問題定位（NPO）」、「回避的問題解決（AS）」の平均がやや低く、難しい問題に直面した時怖くなったり、不安になったり、問題を避けようとする傾向がみられた。1年入学生と比較して、4年進級生・4年卒業生は、否定的問題定位（NPO）、「回避的問題解決（AS）」の平均がやや高く、問題解決を積極的に解決しようとする傾向がみられた。

中澤（2007）では、否定的問題定位（NPO）では男性よりも女性で、衝動／不注意型問題解決（ICS）と回避的問題解決（AS）では、女性

よりも男性で得点が高い傾向がみられている。今回の調査では、対象は女性のみであり比較はできないが、中澤（2007）の結果である否定的問題定位（NPO）2.33、衝動／不注意型問題解決（ICS）1.97、回避的問題解決（AS）1.73とは、衝動／不注意型問題解決（ICS）がやや低い傾向がみられた。

## （2）同一性地位によるSPSI-R

自我同一性地位別に、社会的問題解決に関する尺度であるSPSI-R（①合理的問題解決（RPS）、②否定的問題定位（NPO）、③衝動／不注意型問題解決（ICS）、④回避的問題解決（AS）、⑤肯定的問題定位（PPO））の平均得点（SD）を算出し表6に示した。

同一性地位によるSPSI-Rの下位尺度得点の差を検討するために、分散分析を行ったところ、「合理的問題解決（RPS）」 $F(5,216) = 4.43, p < .01$ 、「否定的問題定位（NPO）」 $F(5,216) = 5.12, p < .01$ 、「衝動／不注意型問題解決（ICS）」 $F(5,216) = 3.02, p < .05$ 、「回避的問題解決（AS）」 $F(5,216) = 7.28, p < .01$ 、「肯定的問題定位（PPO）」 $F(5,216) = 3.56, p < .01$ に有意な群間差がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、「合理的問題解決（RPS）」では、同一性達成と同一性拡散、積極的モラトリアムと同一性拡散・D-M中間、「否定的問題定位（NPO）」では、同一性達成と同一性拡散、権威受容と同一性拡

表6 自我同一性地位によるSPSI-R平均得点

	同一性達成		権威受容		A・F中間		積極的モラトリアム		同一性拡散		D-M中間		合計	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
RPS	2.86	(.68)	2.65	(.37)	2.51	(.77)	2.73	(.52)	2.12	(.72)	2.37	(.48)	2.42	(.55)
NPO	1.90	(.80)	1.67	(.80)	1.79	(.87)	2.36	(.67)	2.76	(.72)	2.39	(.70)	2.33	(.75)
ICS	1.67	(.93)	2.19	(.99)	1.80	(.69)	1.51	(.80)	2.33	(.91)	2.01	(.72)	1.97	(.77)
AS	1.14	(.45)	1.59	(.48)	1.21	(.71)	1.39	(.85)	2.29	(.68)	1.80	(.64)	1.73	(.71)
PPO	2.93	(.55)	2.58	(.56)	2.86	(.50)	2.73	(.70)	2.00	(.78)	2.43	(.73)	2.48	(.73)

散、A-F中間と同一性拡散・D-M中間との間に有意な差がみられた。「衝動／不注意型問題解決（ICS）」では、積極的モラトリウムと同一性拡散との間に有意な差がみられた。「回避的問題解決（AS）」では、同一性達成と同一性拡散、A-F中間と同一性拡散・D-M中間、積極的モラトリウムと同一性拡散、同一性拡散とD-M中間との間に有意な差がみられた。「肯定的問題定位（PPO）」では、同一性達成と同一性拡散、A-F中間と同一性拡散、積極的モラトリウムと同一性拡散との間に有意な差がみられた。

同一性達成群は、他の群と比べ「合理的問題解決（RPS）」がやや高く、同一性拡散群との間に有意な差がみられた。問題に取り組む時に、できる限り多くの解決策を考え、最善の方法を取る傾向がみられた。権威受容群は、他の群と比べ「否定的問題解決定位（NPO）」が高く、同一性拡散との間に有意な差がみられた。重要な事を決める時に不安になり自信がなくなる傾向がみられた。A-F中間地位群は、他の群と比べ「回避的問題解決（AS）」がやや低く、同一性拡散とD-M中間地位との間に有意な差がみられた。問題に積極的に解決するより、それについて考えない傾向がみられた。積極的モラトリウム群は、「衝動／不注意型問題解決（ICS）」が一番低く、同一性拡散群との間に有意な差がみられた。なにかを決めようとする時、とても衝動的である傾向がみられた。同一性拡散群は、「合理的問題解決（RPS）」が低く、「回避的・

衝動／不注意型（ICS）」が高かった。問題を否定的に捉え、「回避的・衝動／不注意型（ICS）」の解決方略をとる傾向がみられた。

### 3. QOSLについて

#### （1）同一性達成地位によるQOSL

同一性地位別に大学生生活の適応の査定であるQOSL 4側面（①生活充実感13点満点 ②自信欠如6点満点 ③体調不良7点満点 ④将来展望6点満点）の合計得点（SD）を表7に示した（QOSLの詳細については、井森ら（2017）を参照）。

同一性地位によるQOSLの下位尺度得点の差を検討するために、分散分析を行ったところ、「生活充実感」 $F(5,215) = 6.75, p < .01$ 、「自信欠如」 $F(5,215) = 9.62, p < .01$ 、「体調不良」 $F(5,215) = 5.45, p < .01$ 、「将来展望」 $F(5,215) = 8.49, p < .01$ に有意な群間差がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、「生活充実感」では同一性拡散と同一性達成・権威受容・A-F中間・積極的モラトリウム・D-M中間との間に有意な差がみられた。「自信欠如」では、同一性拡散と同一性達成・権威受容・A-F中間・積極的モラトリウム・D-M中間との間に有意な差がみられた。「体調不良」では、同一性拡散と権威受容・A-F中間・D-M中間、A-F中間とD-M中間との間に有意な差がみられた。「将来展望」では、同一性拡散と同一性達成・権威受容・A-F中間・積極的モラトリア

表7 同一性地位によるQOSL合計得点

	同一性達成		権威受容		A-F中間		積極的モラトリウム		同一性拡散		D-M中間		合計	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
生活充実感	10.33	(1.50)	9.75	(2.12)	11.14	(2.14)	10.00	(1.84)	6.28	(2.44)	9.05	(2.86)	9.12	(2.81)
自信欠如	2.56	(1.74)	1.25	(1.28)	2.14	(1.70)	3.00	(1.70)	5.11	(1.02)	3.64	(1.69)	3.47	(1.79)
体調不良	1.78	(1.48)	1.63	(1.69)	0.71	(.91)	2.19	(1.54)	3.67	(1.64)	2.29	(1.73)	2.25	(1.74)
将来展望	5.44	(.88)	5.25	(1.49)	4.93	(1.07)	4.43	(1.43)	2.33	(1.57)	4.26	(1.54)	4.24	(1.61)

ム・D-M中間との間に有意な差がみられた。同一性達成群では、「自信欠如」平均得点が低く、「将来展望」が高かった。現在の生活が充実し、将来のために努力していることが考えられる。権威受容群では、「自信欠如」が一番低く、自分の進もうとしている方向に自信がもっている傾向がみられた。A-F中間地位群では、「体調不良」が一番低く、体調が良い傾向がみられた。積極的モラトリウム群では、同一性拡散群の次に「体調不良」が高く、現在の体調はあまり良くないようではあるが、「生活充実感」の得点は低いわけではなかった。同一性拡散群では、他の群と比較し「生活充実感」が一番低く、「体調不良」が一番高かった。いつも疲れていたり、体調が良くないため、大学生活が充実していない様子がみられた。

## (2) QOSLとSPSI-Rの相関について

大学生活の適応の査定であるQOSL 4側面(①生活充実感13点満点 ②自信欠如6点満点 ③体調不良7点満点 ④将来展望6点満点)と社会的問題解決に関する尺度であるSPSI-R(①合理的問題解決(RPS)、②否定的問題定位(NPO)、③衝動／不注意型問題解決(ICS)、④回避的問題解決(AS)、⑤肯定的問題定位(PPO))との相関係数を算出し表8に示した。

「生活充実感」では、合理的問題解決( $r = .19$ )、肯定的問題定位( $r = .35$ )との間に弱い正の相関がみられ、否定的問題定位( $r = -.37$ )、回避的問題解決( $r = -.20$ )との間に弱い負の相関がみられた。「自信欠如」では、否定的問題定位( $r = .57$ )との間に強い正の相関がみられ、合理的問題解決( $r = .19$ )、肯定的問題定位( $r = .35$ )との間に弱い正の相関、否定的問題定位( $r = -.37$ )、回避的問題解決( $r = -.20$ )との間に弱い負の相関がみられた。「体調不良」では、回避的問題解決( $r = .18$ )との間に弱い正の相関、肯定的問題定位( $r = -.15$ )との間に弱い負の相関がみられた。「将来展望」では、合理的問題解決( $r = .32$ )、肯定的問題定位( $r = .34$ )との間に弱い正の相関がみられ、否定的問題定位( $r = -.24$ )、衝動／不注意型問題解決( $r = -.15$ )、回避的問題解決( $r = -.20$ )との間に弱い負の相関がみられた。

生活充実感が高いほど、物事を肯定的に捉え合理的問題解決方略をとり、否定的問題解決を取らないこと、自信がない人ほど、否定的問題解決をする傾向がみられた。この結果から、適切な社会的問題解決と適切な適応との関連が示唆された。

表8 QOSLとSPSI-R相関

	生活充実感	自信欠如	体調不良	将来展望
RPS	.19 **	-.26 **	-.05	.32 **
NPO	-.37 **	.57 **	.39	-.24 **
ICS	.02	.07	.12	-.15 *
AS	-.20 **	.28 **	.18 **	-.21 **
PPO	.35 **	-.24 **	-.15 **	.34 **

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$



## まとめと今後の課題

### 1. 自我同一性地位

自我同一性地位判定尺度の下位尺度得点は、「現在の自己投入」において1年入学生と4年進級生との間に、「将来の自己投入の希求」において4年進級生と4年卒業生との間に有意な差がみられた。4年進級生が目標をなしとげるために努力をする（現在の自己投入）、自分が何をしようとしているのかをいくつかの可能な選択肢を比べながら真剣に考える（将来の自己投入の希求）姿がみられた。

また、自我同一性の判定においては、222名中152名(68.5%)がD-M中間地位と判定された。このD-M中間地位が全体の半数を占める結果は、これまでの大学生を対象とした研究と同様であった。学年があがると、過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っていると言われる「同一性達成」の人数が増える傾向がみられた。

### 2. SPSSI-Rの学年差

各学年によるSPSSI-R下位尺度平均得点は、「否定的問題定位（NPO）」では1年入学生と4年進級生・4年卒業生との間に、「回避的問題解決（AS）」では1年入学生と4年進級生・4年卒業生との間に有意な差がみられた。「合理的問題解決（RPS）」「衝動／不注意問題型解決（ICS）」「肯定的問題定位（PPO）」の平均得点は、各学年に有意な差はみられなかった。まだ大学に入学したばかりの1年生の問題解決方略は、「重要なことを決める時、不安になり自信がなくなる」のように否定的に捉え、「問題を解決するよりも避ける方に時間をかけてしまう」のように回避的な方略をとる傾向がみられた。それに比べ、4年進級生・4年卒業生は、問題解決に積極的に取り組む傾向がみられた。

### 3. 自我同一性地位とSPSSI-Rとの関連

自我同一性地位と社会的問題解決に関する尺度であるSPSSI-Rとの関連を検討した。同一性地位によるSPSSI-Rの下位尺度平均得点は、「合理的問題解決（RPS）」「否定的問題定位（NPO）」「衝動／不注意型問題解決（ICS）」「回避的問題解決（AS）」「肯定的問題定位（PPO）」の全ての間に分散分析で有意な差がみられた。過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っていると言われる同一性達成群は、「合理的問題解決（RPS）」において、現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱いと言われる同一性拡散群との間に有意な差がみられた。現在の自己投入の水準と問題解決方略との関連が示唆された。

### 4. 自我同一性地位とQOSLとの関連

自我同一性地位と大学生生活の適応の査定であるQOSLとの関連を検討した。同一性地位によるQOSLの下位尺度平均得点は、「生活充実感」、「自信欠如」、「体調不良」、「将来展望」の全ての間に分散分析で有意な差がみられた。同一性達成群と同一性拡散群では、「生活充実感」、「自信欠如」、「将来展望」において有意な差がみられた。現在高い水準の自己投入をおこなっている者は、大学生生活が充実し将来への目標を持っているが、それに比べ、現在低い水準での自己投入しか行っていない者は大学の居心地が悪く、体調不良に悩まされていることが示唆された。

### 5. 今後の課題

本研究において、現在の女子大学生の自我同一性地位を検討するとともに、それが社会的問題

解決能力であるSPSI-R、大学生生活の適応の査定であるQOSLとどのように関連しているかを検討した。これまでの研究と同様に自我同一性地位では、D-M中間地位が全体の半数を占める結果となった。社会的問題解決においては、否定的問題定位（NPO）、回避的問題解決（AS）に1年入学生と4年進級生・4年卒業生との間に有意な差がみられた。これまでの研究では、「問題定位」では女性の方が問題を否定的に捉え、「問題解決方略」では男性の方が衝動/不注意型問題解決（ICS）、回避的問題解決（AS）を行っていた結果が報告されている<sup>8)</sup>。また、米国大学生を対象とした調査では、男性において肯定的問題定位（PPO）が高く、女性において否定的問題定位（NPO）、回避的問題解決（AS）が高い結果が報告されている<sup>15)</sup>。つまり、社会的問題解決能力には男女差や文化差が影響していることが示唆されている。今回の研究においては、一校の女子大学の限られた学科で行われている。女子大学だけではなく様々な大学、様々な学科で、今後さらに検討していく必要がある。

## 付記

最後に、本研究にご協力いただきました皆様に感謝いたします。

## 文献

- 1) Ericson, E. H. 1959 Identity and the Life Circle. 小比木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠心書房
- 2) 小比木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央論者
- 3) 石谷真一 1994 男子大学生における同一性形成と対人関係性 心理学研究, 42, 118-128
- 4) 岡本祐子 2002 アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 5) Marcia, J.E. 1966 . Development and validation of ego identity status. J. Personal. Soc. Psychol., 3, 551 —558.
- 6) 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302
- 7) 畑潮・小野寺敦子 2013 大学生のエゴ・レジリエンスと自我同一性および精神的健康の関係 目白大学心理学研究, 9, 37-51
- 8) 中澤潤・榎本淳子・中道圭人 2007 社会的問題解決が大学生の適応に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要第55巻, 61-69
- 9) Takahashi, K. 1990 Affective relationships and lifelong development In P.B.Baltes, D.L.Featherman&R.M.Lerner (Eds.) Life-span development and Behavior, Vol.10 Hillsdale, NJ:Erlbaum.1-27
- 10) Takahashi, K., & Sakamoto, A. 2000 Assessing social relationships in adolescents and adults : Constructing and validating the affective relationships scale. International Journal of Behavioral Development, 24, 451-463.
- 11) Armsden, G., &Greenberg, M.T. 1987 The Inventory of Parent and Peer Attachment : Individual differences and their relation to psychological well-being in adolescence. Journal of Youth and Adolescence, 16, 427-454.
- 12) 井森澄江・伏見友里 2017 大学期における女子大学生の対人関係の形成と大学への適応 東京家政大学附属臨床相談センター 紀要, 17
- 13) D’Zurilla, T. J., Nezu, A. M., & Maydeu-

- Olivares, A. 2002 Social Problem-solving inventory-revised (SPSI-R). New York : MHS
- 14) 福盛英明・峰松修・一宮厚・馬場園明・永野純・上園慶子・藤野武彦・丸山徹 2002 大学生のQOLの研究(2) 簡易版「大学生チェックカタログ45」の開発と実施 平成12-13年度科学研究費補助金研究成果報告書大学生の生活の質 (Quality of Student Life) に関する研究—「大学生生活調査カタログ」の開発 (代表者 峰松修) 13-32
- 15) D’Zurilla, T. J., Nezu, A. M., & Maydeu-Olivares, A., & Kant, G. L. 1998 Age and gender differences in social Problem-solving ability. *Personality and Individual Differences*, 25, 241-252.

## Abstract

This study examined the relationships between identity status, social problem-solving, and social adjustment. University students (N=222, M=20.35 years old) completed the questionnaires on identity status, the SPSI-R (Social Problem-Solving Inventory-Revised) as a measure of social problem-solving, and the QOSL (Quality of Student Life) as a measure of social adjustment. In our measurement of ego identity, 152 (68.5%) of the 222 participants were found to be in the D-M intermediate level. Rational problem -solving was related to social adjustment and avoidance style was related to social maladjustment.

**Keywords :** Identity status, social problem-solving, SPSI-R (Social Problem-Solving Inventory-Revised), QOSL (Quality of Student Life)

